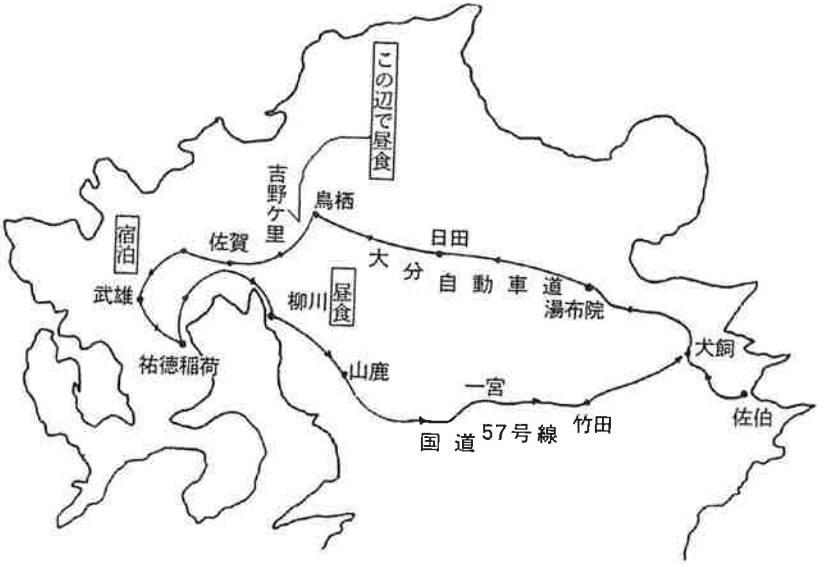
佐伯史談会秋の研修旅行
肥前・筑後・肥後路を行く

後藤知久
（会員・佐伯市中山区）

十月十八日、十九日の二日間昨年の佐伯史談会の秋の研修旅行は、予定通り吉野ケ里遺跡をはじめ、肥前・筑後・肥後の旧跡をたずねました。

参加者は女七名、男十五名、計二十二名でした。予定コースのうち、祐徳稲荷様は時間の都合で割愛しました。



はじめに

「貴方。まるで子供の遠足ね」

リュックサックにお菓子や蜜柑・ゆで栗を詰めている私を見て、妻は笑っている。

正直の処、私の心は躍っていた。言うとおり子供の遠足の前の晩のような気持ちだった。

昨年の旅行は、丁度前々から私の立てていた計画と重なって、心ならずも参加しなかったので、その分、今年は待ちに待っていた。団体旅行の嫌いな私にとって、この旅行は唯一の例外である。

さて、いざ出掛けようとすると大変である。妻はいつものように私の服装を見て注文を付ける。結局、私は三度も着替えをした。

三の丸に着くと、既に大半の人は集合していて、程無く、定刻車は佐伯をあとにした。総員二十二名。二日間の旅への出発である。

佐伯から武雄まで

天気は快晴。絶好の旅行日和である。九州の北の方に行くのだからと、少し余計に着こんできたので暑い。今年も豊作なのだろう。沿線の柿の実がたわわにみのって美しい。南の国の紅葉は遅く、赤く色付いたはぜが一段と鮮やかである。

往路は大分自動車道を通り、日田から高速道へのコースを通る。これも楽しみの一つである。

この日田からの高速の開通によって、私は福岡行のバスをちょいちょい利用している。高原を思い切りとばす車の魅力がたまらない。晴れた日は特にいい。その眺めのいいドライブインで一服する。時間は予定よりやや下がっているようである。

天瀬の外れ、日田よりの食堂で昼にする。うどんを頼む。前に熊本から帰りに寄った食堂のうどんのまずかったことを思い出し、あまり期待せずに待つ。ところが箸をつけて驚いた。いい味である。私は思わず箸を握り直した。

「こいつぁ春から縁起がいいわえ」

じゃなく

「こいつぁ始めから縁起がいいわえ」

である。

信号機の多い日田の町中を通って高速道路に入る。眼下に県境の村々が広がる。海沿いの町や村の背後地に蜜柑山が広がるように、ここは梨と柿の山が続く。所変われば品変わるである。いつも高速道路に入って感じるのは、開放された安堵感である。対向車もなければ信号機もない。思うままに走れる。それが心に安らぎを与えてくれる。着きもしないのに目的地に着いたような気持ちを与えてくれる。その魅力に引かれる。

1　吉野ケ里遺跡

最初の見学地は吉野ケ里遺跡。私は、昨年の正月福岡に行ったついでに、一人でここを訪れたことがある。でも、見落とした所が多く、改めてゆっくりと見学した。特に印象に残ったのは、死者を葬る墓とかかめ棺だった。それは、広い場所を取る大きなものだった。約二時間丹念に見て歩いたが、ここは不思議と、何度でも来たくなるような何かがある。いままた、新しい地点を発掘しているので、それが終ればもう一度来て見たいと思う。

2　多久の孔子聖廟

正直の処、多久市という町の名は初めて知った。道が分からなくて、あまりぐるぐる回ったので、佐賀県のどの辺なのかもさっぱり分からなかった。だからその町にこんな立派な建物が残っているなど夢にも思わなかった。その名のとおり孔子と四哲を祀った廟である。

古いががっちりした中国風の赤い建物であった。

市では観光の目玉にしているようだが中心部より大分離れた奥の方なので、観光の目玉にしてはやや弱さを感じた。

椎原山の麓今から二百五

（多久の孔子廟）

十年前、多久邑主多久茂文の創立。高さ七間、横九間二合、奥行十二間。孔子像のほか顔子・曾子・子思・孟子の四哲人像を安置していたが、昭和二十九年に盗難にあったそうである。しかし、建設当時のまま残っているのがこの聖廟だそうだ。

孔子廟をあとにするころは、もう秋の日は暮れかかっていた。再び高速道路に入り、宿泊地武雄に向かう。

（武雄温泉）

武雄は温泉のある町と聞いていたが、それらしいふんいきは感じられなかった。宿は「なかます」というホテル。料金のわりに食べものもそう悪くはなかった。いつも思うのだが、史談会の旅行の楽しみは、何処へ行ってもおいしいものにありつけることも入っている。

3　高伝寺

前日見学予定の佐賀市内が、時間の都合で今日になったので、祐徳稲荷の参拝は取りやめる。まず、高伝寺へ行く。

高伝寺は旧藩主鍋島家の菩提寺である。曹洞宗（禅宗）のお寺で、本山は永平寺である。今から四百二十余年前藩祖鍋島直茂公の父清房公により天文二十一年（一五五二）創設された。境内の総面積は一万余坪。その境内には沢山の梅が植えられていて、花の季節になると、お寺参りより花見の客が多いそうである。

建物は古く、本堂での話を聞いたあと、鍋島家のお位牌堂に案内された。堂の中央に金色の、高さ六尺に及ぶ阿弥陀仏が安置され、その左右に大小二百にのぼる龍造寺・鍋島両家の位牌が並べられていた。開けば、大の男二人でも持つのが大変だということである。

その位牌堂に行く途中の廊下に長さ三間半ばかりの木

の箱があったので、私はこの上に座って座禅をするのかと思ったら、それは、大涅槃像の掛け軸が入っている箱で、日本中に二つしかないという貴重なものを入れたものだった。見たいと思ったけれども、それは、四月の釈迦堂のご開扉の日のみ一般公開するとのことだった。

本堂の西裏に、約六反あるという墓所があった。歴代の藩主の墓と一族のは基は別々になっていた。私が不思議に思ったのは、一族の墓の方には石の門があることだった。しかもその門が多久の孔子聖廟で見た石の鳥居によく似ていたことだった。しかし、藩主の墓にはそれはなかった。

高伝寺
恵日山と号し、曹洞宗で天文二年（一五五二）創設。鍋島・竜造寺家歴代藩主の墓碑や灯篭が整然と並び壮観である。
佐賀の春は、この高伝寺の梅のほころびとともに始る。

もうひとつ。藩主の墓は何処へ行っても立派だが、毛利家のそれは数こそ少ないが、何処のにも負けない立派なものだと改めて知った。昔の佐賀を知るのに貴重な見学であった。

4 佐賀城

佐賀城は、慶長十六年（一六一一）完成。鍋島三十五万石の礎を築いたが、享保十一年（一七二六）三月、火炎により本丸・二の丸・天守閣を焼失し、続いて天保六年（一八三五）五月、三の丸を除いて焼失した。同じ天保九年再建されたが、明治七年（一八七四）、佐賀の乱で書院と、現存する小城門を除いて焼失した。

訪れた佐賀城祉は、今は小学校や幼稚園の運動場になっていて、往時を偲ぶことは出来なかった。

ついでに佐賀博物館に行ったが、時間がなくて、入口の石棺を見るだけにとどめた。

5 水の都柳川

筑後路の旅を思へば水の里や柳河うなぎのことに恋ひ

しき　　劉　寒吉

柳川は城を三めぐり七めぐり水めぐらしぬ咲く花蓮
（はちす）　　北原白秋

柳川は十二万石の城下町。一度は行ってみたいと思っていた所である。

秋の国体を控えて、町にはちらほらと選手の姿も見られる。佐賀で気が付いたのだが、こちらの方の町には余り高い建物は見られない。不思議に思えた。お目当ての「お花」へは何度か間違えてやっと着いた。予定では午前十時着ということだったが、午後の一時になっていた。

さて、そのお花だが、これは明治のころ建てられた城主立花家の別邸で、木造の二階建て洋館。当時、九州の鹿鳴館と言われたそうである。見事なのはお庭で、松涛園と呼ばれ、二百八十本の松、それに大小様々な石で構成され、まるで一幅の名画を見るようである。昔の殿様は、庭作りには高い見識を持っていたのだろう。特筆すべきは、周りを取り巻く堀である。その堀が柳川の観光を代表する川下りに生かされている。

始めは乗るつもりではなかった私も、三十分コースがあると聞いて、乗ってみることにした。「お花」からすぐ近くの乗船場から舟が出る。

川下りは四季それぞれに趣きがあるそうだが、一番いいのは、やはりあやめの花の季節だそうだ。堀の水は決してきれいとは言えないが、かといって不快な気持ちになることもない。川の両岸に住む人も心得たもので、雰囲気を壊すようなことはしていない。三十分コースは「お花」の周りを一周するだけだが、一時間コースは、町中を流れる堀にも入るとか。別に何も変わったことはなかったが、なんとなく長閑な気持ちになった。料金は一人六百円であった。

考えてみると、この堀は城の守りのために造ったのだ

ろうが、それが今、柳川の貴重な観光資源になっているなど、時の流れというものは何が起き、何が役に立つようになるか分からないものだと思う。

そうそう。もう一つ柳川で忘れてならないものがあった。それは鰻のせいろう蒸し。少し時間は下がったが、お昼をこの「お花」でとることになった。私は、柳川名物のどじょうの柳川鍋を食べてみたかったが、これは予約をしておかないと出来ないということで、やむなく鰻のせいろう蒸しを頼んだ。

食堂は団体と社会見学の子供たちでいっぱい。待つほどもなく注文の品が運ばれてきた。前にトキハデパートの食堂で鰻を食べたが、余りのまずさにがっかりしたことがあったので期待はしていなかったが、どうしてどうして、結構おいしく頂いた。「名物にうまいものなし」というが、なかなかどうして「名物にうまいものあり」で満足した。天瀬のうどんといい、ホテルの食事といい今度の旅も食べものには恵まれた。

帰りは、熊本まで高速道路。あとは阿蘇・竹田を経由して、午後七時半無事佐伯に着いた。

いつも思うのだが、私がこの史談会の研修旅行に喜んで参加するのは、一人では到底見ることの出来ないものが見られるという楽しみがあるからである。今度の旅にしても、佐賀の高伝寺をこんなによく見学出来たのもその一つである。表面的な見学にとどまらず、過去の歴史まで立ち入ることの出来るのも史談会ならではのものと思う。そのために前もって準備をして頂いた方々に改めて感謝したい。それと同じに、普通の団体旅行と違って車の中の乱痴気騒ぎ、宿での馬鹿騒ぎのないのも嬉しい。団体行動の中の自由。それらが私を引き付ける。

「来年のことを言うと、鬼が笑う」と言うが、今からもう次の旅行を楽しみに待っている。

最後に、この旅で色々とお世話下さった方々に感謝して筆を置こう。有難うございました。